

結局今年の夏も厳しい猛暑が続きましたが、ここへきてようやく朝夕涼しく感じられるようになってきました。

さて、9月はお彼岸です。彼岸とは仏教の目的そのものをあらわす言葉で、「<sup>と</sup>至彼岸(悟りの世界に至る)」という意味です。仏教は私たちが目で見て感じている世界を此岸(迷い苦しむ世界)とし、そこを離れ清らかで一切迷い苦しみのない彼岸に至ることを勧め、その方法を説くみ教えです。その方法のことを「<sup>ぎょう</sup>行」ともいいます。

以前寺報で一度ご紹介したことがあると思いますがもうお亡くなりになりました天台宗の有名な行者に酒井雄哉という方がおられました。その方の言葉を綴った「一日一生」という本がかなり売れたそうです。私も気になり「続・一日一生」という本を購入して読んでみました。本の中は取材者の質問に優しく深く対応されている酒井師の言葉が大変読みやすく綴られていました。

その中に「人間はたいしたことないよなあと思いついた瞬間」という題があり

ました。酒井師は千日回峰行という天台宗の修行を2回満行(完了)されていることで有名です。千日回峰行とは比叡山を千日間一日約30キロ多い日は80キロ7年かけて歩き通すのですが、700日過ぎたところで「堂入り」という9日間お堂に籠る別の行があるそうです。この行はただ籠るのではなく9日間、断食、断水、不眠、不臥で真言を十万回唱えるというもっとも厳しいものだそうです。その堂入りの行では5日目になると一日に一回うがい許されるそうですが、その時のことを話しておられました。「…おそらく、人は死ぬとき、最後には水がほしくなるんじゃないかな…うがいの水は、ぼくには甘くて何とも言えない味でね。おいしく感じたね。でもその水はあくまでもうがいの水だから決して飲みこんではいけない。だから、うがいが終わって二、三時間たつと、口の中の渴きが戻ってくる。水が恋しくなるんだな。ほしいなと思うものすごく苦しい。どんなえらいことを言っても人間の欲というものを抑えるのは、本当に難しいものだ。」

この話を読まれてもだいたいお解りいただけるかと思いますが、仏教で行をおこなうのは自分の煩惱(欲)と向き合い、その煩惱をにより取り除いて迷い苦しみのない悟りという境地に至る(至彼岸)ためのものであります。先ほどの酒井師のお話は、命がけの修行で見えてくる煩惱の底なしの深さを正直に教えてくれるお話しに思えました。さて浄土真宗は阿弥陀仏がおこなった命がけの行の結果を聞いて慶ぶ仏教です。そここのところが他の仏教とまったく異なります。阿弥陀様は最初から私たちが自分の力で煩惱を断ち切ることができないことをご存知でした。しかしその煩惱を抱え生老病死に迷い苦しむものを、どうしても見捨てることができず代わりに自ら命がけの修行をされ、私たちの煩惱を断ち切るご用意をすべて完成されました。それが、阿弥陀仏のお浄土であると『仏説無量寿経』に説かれてあります。浄土真宗はその阿弥陀仏のお慈悲にいのちのすべてをまかせ、感謝の日々を送る仏教です。それを表す言葉が、南無阿弥陀仏です。

## 写経と法話会(常例)

9月9日(月) 14時～ 妙蓮寺にて

写経は『仏説阿弥陀経』を少しずつ進めています。(テキスト代 864円税込)

法話会では『正信偈』を少しずつあじわっていきます。

---

## 秋のお彼岸法要

日時 9月21日(土) 14時～

14時～法要・『仏説阿弥陀経』

14時40分頃～ご法話(30分2席)

講師 村上弘樹師 築地本願寺専従員

(毎回楽しくお話くださいます!)

15時50分頃～茶話会

場所 妙蓮寺(駐車場有)

※法要の中でお焼香を行っていただきます。

※初彼岸の方は過去帳かお位牌をご持参願います。

---

## 法話会(特別)

日時 10月9日(水) 14時～

14時～読経・『正信偈』

14時30分頃～ご法話(30分2席)

講師 東元晃慈師 広島県真宗学寮講師

15時40分頃～茶話会

場所 妙蓮寺(駐車場有)

※恒例となってきました東元先生、妙蓮寺住職とも学友であります。お忙しい中、遠路にもかかわらず快くご受諾いただきました。わかりやすくお話くださると思います。